

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第174号

イザヤ 65:1

平成22年3月26日

あなたは、いけにえや穀物のささげ物をお喜びにはなりません。あなたは私の耳を開いてくださいました。あなたは、全焼のいけにえも、罪のためのいけにえも、お求めになりませんでした。そのとき、私は申しました。「今、私はここにきております。巻き物の書に私のことが書いてあります。わが神、私はみこころを行うことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。」 詩篇40:6-8

律法には、後に来る素晴らしいものの影はあっても、その実物はないのですから、律法は、年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって神に近づいて来る人々を、完全にすることができないのです。もしそれができたのであれば、礼拝する人々は、一度きよめられた者として、もはや罪を意識しなかつたはずであり、したがって、ささげ物をするのは、やんだはず。ところがかえって、これらのささげ物によって、罪が年ごとに思い出されるのです。雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。あなたは全焼のいけにえと罪のためのいけにえとで満足されませんでした。そこでわたしは言いました。『さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについてしるされているとおり、神よ。あなたのみこころを行うために。』」すなわち、初めには、「あなたは、いけにえとささげ物、全焼のいけにえと罪のためのいけにえ（すなわち、律法に従ってささげられる、いろいろの物）を望まず、またそれらで満足されませんでした。」と言ひ、また、「さあ、わたしはあなたのみこころを行なうために来ました。」と言われたのです。後者が立てられるために、前者が廃止されるのです。このみこころに従って、イエス・キリストのからだは、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。ヘブル人10:1-10

初代教会の時代、使徒パウロは、モーセの律法と預言書とによってイエス・キリストのことを語りましたが、キリストはモーセの律法と預言書と詩篇にはご自分のことが書かれてあり、そのすべてが成就すると言われました。キリストは公のミニストリーを始められたとき、シナゴグで預言者イザヤの書を朗読され、ご自分がこの世に来られたことによって「**主の恵みの年**」が始まったと解釈されました。この年はやはりイザヤの預言した「**神の復讐の日**」（イザヤ書61:2b）で閉じられることとなりますが、今日すでにほぼ二千年になろうとしています。したがって、この世を裁くために来られるキリストの再臨が近づいている今日、詩篇こそ、注目されるべき預言書といえるかもしれません。詩篇の解説は今日の大きな課題といえるでしょう。今月は過越の祭り、キリストの受難と甦りに因み、メシヤの詩篇の中から「いけにえ」について記している40:6-8を考察することにします。

中心に向かって対照的に美しいキアズムで構成されている詩篇40篇の中心は6-8節です。この詩篇の背景はサウル王に追われ、長い国外追放の辛苦を味わった末、ついに主によって解放されたダビデ自身の経験で、『サムエル記第一』13~16章にその詳細が記されています。サウルのダビデに対する敵愾心の背景を知るためには、歴史をさかのぼる必要があります。他の異邦人諸国と同じように、イスラエルにも人間の王が欲しいとの民の要求が聞き入れられた結果がイスラエルの最初の王サウル誕生でした。しかし、身の丈が頭分だけ高い立派な武者サウルが民のお気に入りとして王に即位した時点ですでに、人の選んだ器がいかにか失格であるかを神の視点からサムエル記は語っています。イスラエル人の選んだサウルに王として油注ぎをしたとき、祭司サムエルは、主にいけにえをささげるためにギルガルに下って七日間待つようとサウルに指示をしました。しかし、約束の期日がやってきたとき、日に日に軍勢の増えるペリシテ軍に脅威を感じ、攻撃開始を焦っていたサウルは、サムエルの到着を待ち切れず、主に不従順な心で勝手に「全焼のいけにえと和解のいけにえ」をささげてしまいました。恐怖、忍耐不足、不信仰から主の御旨を無視したサウルに、サムエルは「あなたは愚かなことをしたものだ……あなたの王国は立たない。主はご自分の心にかなる人を求め、主はその人をご自分の民の君主に任命しておられる」と冷やかに主の宣告を告げました。次に主は、サムエルに「人はうわべを見るが、主は心を見る」と言われ、サウルに代わって主の選びはダビデであることを明らかにされました。こうして、まだサウルが王として君臨している最中に、ダビデはサウルを継ぐ王として、しかし、主の選ばれたイスラエルの初代の王として、油注ぎをされたのです。サムエルは「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる」と教え、ダビデ以降、神の代理人として主の掟を自ら守り、民を支配し裁くことを委任されたイスラエルの王は、サウルの教訓を通して、「従う」ことが「いけにえ」にまさることを銘記しなければならなかったのです。

新約の時代、パウロはこのイスラエル史を「それから、彼（サウロ）を退けて、（神は）ダビデを立てて王とされましたが、このダビデについてあかしして、こう言われました。『わたしはエッサイの子ダビデを見いだした。彼はわたしの心になつた者で、わたしのころを余すところなく実行する。』神は、このダビデの子孫から、約束に従って、イスラエルに救い主イエスをお送りになりました」（使徒の働き 13：22-23）と説き明かし、ダビデとキリストとを関連づけました。すなわち、パウロは、このキリストが、ダビデの血筋の「神への従順」の伝統を引き継ぎ、神の御旨を行なう王として来られたことを明らかにしたのです。

さらに、ヘブル人への手紙の著者も、冒頭に引用したように「キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。『あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。あなたは全焼のいけにえと罪のためのいけにえとで満足されませんでした。そこでわたしは言いました。『さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについてしるされているとおり、神よ。あなたのみころを行うために。』」（ヘブル人 10：5、下線部は LXX からの引用部）と記しています。同じように、神が喜ばれるのは「従順」、すなわち、御言葉を行うことであることと、キリストはダビデの血筋の王として神に「従順のいけにえ」をささげるために来られたこととを、詩篇 40：6-8 を引用することによって明らかにしています。

ただし、新約聖書では、ヘブル語聖書からではなく、紀元前三世紀にヘブル語からギリシャ語に翻訳された旧約聖書 LXX（七十人訳ギリシャ語聖書）から引用しているので、冒頭に引用したヘブル語聖書の「あなたは私の耳を開いてくださいました」は「わたしのために、からだを造ってくださいました」になっています。ヘブル語聖書のこの言葉から次のことが言えます。1. 耳を開くことには、「神の言葉」に聞き従う「従順」が象徴されており、「従順」がいけにえにまさることが明示されている。私たちの耳が本当に神の言葉に開かれると、身体中が従順へと動員されることになり、ここにキリストの受肉が示唆されているといえる〔後半で考察〕 2. 旧約の掟が要求した罪のいけにえがイスラエル史において繰り返しささげられてきたが、キリストの「従順」は完璧で、これだけが神が望まれた唯一の真のいけにえであった。それはキリストご自身をいけにえとして十字架の上にささげることであり、まさにキリストは「死に至るまで従順であられた」（ピリピ人 2：8）。すなわち、このキリストのいけにえに象徴されているのは、「動物犠牲ではなく、自己をささげる従順」であった。

このように、ヘブル語聖書に記されている神の掟の要求も、定められた当初から形式的な動物犠牲ではなく、いけにえに象徴された「自己の死」だったのです。それには、ヘブル人への手紙の著者が解釈しているように、どの動物によってもささげることのできない「神の御心を行うことを喜びとする」という自発的な献身が伴ったのでした。動物犠牲が律法の要求する義務、合法的義務であれば、自己をささげる従順は道徳的必要として要求されたのでした。新約聖書は神がもはや血のいけにえを要求されないことを教えていますが、ヘブル人 10 章はまさにそのことに言及しています。旧約のいけにえ制度は「律法に従ってささげられる、いろいろの物……あなたのみころを行うため……後者が立てられるために、前者が廃止されるのです」と語られているように、キリストの従順に置きかえられたとき、それは最初で最後の最も恐ろしい残酷な血のいけにえになったのでした。新約時代のキリスト者が旧約のいけにえ制度から解放されたのを喜ぶのは、そのような制度が原始的で流血沙汰であったからではなく、そのような制度が信者にとって、果てしなく続く重荷であり、また実際問題、決して罪を除き去ることができなかったのに繰り返さなければならなかったからなのです。二千年前、カルバリの丘でキリストが「罪のために一つの永遠のいけにえ」をささげてくださり、「聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全う」してくださったことによって、罪人が神との自由な交わりに戻された今日、私たちキリストの救いを信じる者はユダヤ教の「過越のいけにえ」に戻る必要は全くないのです。

しかし、このような神の恩寵による一方的な救いの道をすべての者が喜んで受け入れるかということ、意外にそうではないようです。いけにえをささげることによって、従順、また、自分自身をもささげることによって、すなわち、自分の側の努力、奉仕、労苦によって、神の言葉「聖書のある巻」を全うしたいと願う人が多いのです。人が自分の努力、働きで目標を達成しようとするものであることは、この世にご利益宗教が満ちていることから明らかです。エリヤの時代、偶像神バアルの信者たちも自分の身体を激しく傷つけることによって神の関心を買い、神を呼び求めたものでした。しかし、神との正しい関係にありたいと願い、人が試みるこれらすべてのことは、キリストの死と甦りによって、完全に廃止を告げ知らされたのです。キリストの従順といけにえによってもたらされた「贖い」による救いのみが、全会衆の中で告げ知らされるべき「義の良い知らせ」であることが「福音」として全地に伝えられたからです。「私の耳を開く」のヘブル語は文字通りには「掘った、穴を刺しとおした」の意で、主への従順によって、神の啓示を受けることを象徴しています。古代イスラエルでは、耳を主人の家の戸に突き刺して、終身の従属を誓った「奴僕」の制度がありましたが、この言葉は、奴僕突きぎりを、キリストの身体が十字架の上に打ちつけられたことに関連づけています。LXX がこのヘブル語を「からだを造ってくださいました」のように解釈したのは、神の奴僕、キリストがいけにえ制度をご自分の身体で全うしてくださったからであり、この贖いによって、律法違反者であるすべての人間と神との和解がもたらされたのでした。